

論文の内容の要旨

論文題目 アメリカ及び日本現代小説における非ロマン主義的『ドン・キホーテ』受容に関する比較考察

氏名 田中 有美

スペインの作家ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』（前篇1605年、後篇1615年）は、出版直後からスペイン本国を超えて広く流通し、多くの言語に翻訳されてきた。各文化圏、各時代ごとに、様々な作家や批評家によって、芸術作品に取り入れられ、模倣され、批評の対象となってきた。そのような多様な受容のなかに、大きな二つの流れがあることを実証的な手続きを踏まえて指摘したのは、イギリスのスペイン文学研究者アンソニー・クロースである。クロースによれば、騎士道物語のパロディである『ドン・キホーテ』は、基本的には笑いを誘う滑稽本であった。ところが、十九世紀ドイツで起こったロマン主義の主導者たちは、『ドン・キホーテ』に独自の解釈を施し、高く評価した。たとえば、フリードリヒ・シェリングは、『ドン・キホーテ』において、理想と現実の対比関係が無限に積み重なっていることを指摘し、それを、より高次の理解へと導く「アイロニー」をみなした（『芸術哲学』）。そのようなロマン主義者たちの解釈が次第に浸透し、作品のもつ滑稽な諷刺色には関心が払われなくなり、主人公のドン・キホーテも騎士道物語を読みすぎて理性を失ったおかしい老人から、現実世界に対し負け戦を挑む悲劇の英雄へと変貌を遂げる。クロースは、この19世紀のロマン主義者たちの『ドン・キホーテ』論を起源とする新しい潮流を「ロマン主義的解釈(Romantic approach)」と呼ぶ。とくに、19世紀末から20世紀前半にかけて活躍し、『ドン・キホーテ』批評においても大きな影響力をもったスペインの思想家たちがこのロマン主義的解釈に基づく著作を多数生み出した。それゆえ、ヨーロッパにおいて、ロマン主義的な『ドン・キホーテ』解釈が優勢となった、というのがクロースの主張である。クロースがもたらした議論は、スペインのセル

バンテス研究にも大きな衝撃を与え、賛否両論を引き起こした。

このようなロマン主義化された『ドン・キホーテ』解釈は、ヨーロッパ以外の地域にもみられるのだろうか。また、クローズは批評のみに焦点を当てているが、『ドン・キホーテ』は様々なジャンルの芸術作品を通して受容されてきたことを考えれば、創作の場においても、ロマン主義化はみられるのだろうか。本論文の目的は、クローズの主張が喚起するこのような疑問を考察することである。ここでは、ヨーロッパの外部であり、ともに、自国の文学を成立させるにあたってヨーロッパ文学から強い影響を受けてきたアメリカ合衆国と日本という二つの文化圏に焦点をあて、現代小説における『ドン・キホーテ』受容を分析することによってこの疑問に取り組んだ。そして、それぞれの国の文学に、ロマン主義的解釈とは異質な『ドン・キホーテ』受容の水脈があることを示した。

第一部ではアメリカの小説を、第二部では日本の小説を論じている。第一部では、三人のアメリカ南部作家の作品を通して、非ロマン主義的な『ドン・キホーテ』受容の系譜を明らかにした。第一部第一章では、ウィリアム・フォークナーのヨクナパトーフア・サーガの主要登場人物の四人を考察した。その四人とは、フォークナー自らドン・キホーテとの類似性を認めているクウェンティン・コンプソンとギャヴィン・スティーヴンズに加え、ホレイス・ベンボウ、バイロン・バンチである。ドン・キホーテがドゥルシネアに献身したように、この人物たちは、自らの強い思いを傾ける女性たちとの関係において、理想と現実の狭間で葛藤している。フォークナーは、ロマン主義的ドン・キホーテ像に重なる人物を物語世界のなかに一貫して登場させているわけであるが、視点を変えた語りの導入や、描写の筆致を精査すると、このようなキホーテ的人物たちはロマン主義的に称賛されているのではなく、むしろ、相対化され、批判的に表象されていることがわかる。フォークナー自身は、比較的ロマン主義的解釈に近い『ドン・キホーテ』理解をしていたが、上記四人の登場人物たちが示すキホーテイズムは、その理解とは異なる、自己批判性を備えたものである点を明らかにした。

第一部第二章では、ウォーカー・パーシーの『映画狂』の主人公、ビックス・ボーリングと『ドン・キホーテ』との関係を論じている。ビックスは、周囲をさ迷いながら、現在の自分と、過去の経験や虚構（映画）を結びつける「探求」という営みに取り組んでいるが、それは、旅をしながら現実世界に騎士道物語を読み込んでいくドン・キホーテの遍歴の旅と同じ構造をしている。さらに、現実認識における虚構と現実の交錯、女性の不在性、ボーリング家の伝統の重みという視点から、ビックスとドン・キホーテの類似性を考察し、パーシーがドン・キホーテ的行為の喜劇性を強調していることを示す。

第一部第三章では、ジョン・トゥールの『愚か者連合』について論じる。主人公のイグネイシアスを「太ったドン・キホーテ」に譬えたのはパーシーであるが、その指摘通り、イグネイシアスという人物において、ドン・キホーテのもつ理想主義とサンチョのもつ身体性が一体化

しており、この主従がもつ喜劇性を最大限にまで高めた存在であることを示した。

第二部では、1990年以降、日本において相次いで出版された、『ドン・キホーテ』との密接な関係を標榜する三つの小説を取り上げ、ロマン主義解釈とは一線を画する『ドン・キホーテ』受容の系譜があることを示している。第二部第一章では、矢作俊彦の『スズキさんの休息と遍歴』を取り上げている。主人公スズキさんは、1968年の全共闘時代的価値観を今なお奉じているという意味で、ドン・キホーテに重ねられ、喜劇的色彩が濃厚とはいえ、ロマン主義的に理想化されている。この作品で特筆すべきは、物語の背景として、全共闘時代当時、「ドン・キホーテ」が否定的比喻として機能していたという設定を採用している点にある。実際、マルクスとエンゲルスの共著『ドイツ・イデオロギー』を起源とし、花田清輝の著作を含めたマルクス主義的文脈では、ドン・キホーテとサンチョの主従は反革命的な存在として捉えられており、肯定的な意味を担っていない。そのようなマルクス主義的な『ドン・キホーテ』受容を作品の背景に取り入れているという意味で、この小説は興味深い。

第二部第二章では、高橋源一郎の『ゴーストバスターズ』が、「小説の祖」としての『ドン・キホーテ』を取り込みながら、現代において「小説」というジャンルが抱える困難を比喩的に描く、一種の「小説論」であることを示している。

第二部第三章では、大江健三郎の『憂い顔の童子』を考察している。この作品では、帰郷した主人公長江古義人の周辺で起こる一連の出来事が、『ドン・キホーテ』をなぞるかたちで説明される。相次いで災難がふりかかる古義人の描写において、身体性や下降運動が強調されていることに注目し、大江自身が精通しているミハイル・バフチンの『ドン・キホーテ』理解を踏まえながら、『憂い顔の童子』が、『ドン・キホーテ』がもつ「グロテスク・リアリズム」を強化したかたちで受容していることを明らかにした。

ヨーロッパの『ドン・キホーテ』批評を席卷したロマン主義的解釈は、日本及びアメリカの批評や、小説以外のジャンル、たとえば、映画やミュージカルなどには今なお色濃く見て取ることができる。しかし、上記六人の作家たちの作品分析から、日本とアメリカの現代小説の領域では、ロマン主義的解釈とは異質な受容の系譜を見出すことができるのである。